



かわっていくこと

校長 石山 秀樹

…正直、私は運動会が大嫌いだった。「どうせ勝ってもいいことないし、一生懸命にできる人はスポーツが得意な人だけだ。」と思っていた。…運動会当日も予想通り負けてしまった。あきらめかけていた私の心に響いたのは、友達の言葉だった。

「これで、あきらめている人がいたら、運動会やっている意味ないよ。」

「運動会をする意味って何。」

と、私はその人に聞いた。

返答はこうだ。

「勝たなくても、全力を出し切って、自分を高めること。」

私は今まで運動会は遊びのようなものぐらいに思っていた。でも本当は、深い意味があったのだと気付かされた。…(中1A M.I.「忘れられない思い出」より)

…練習を始めたばかりのとき、「主役でもないし。それほど重要な役でもないよね。」と思っていた。だから、周りの友達ほど練習に打ちこむことができていなかった。自分の百パーセントを出すことはできていたけれど、「もっとのばせる。」というところをのばせないでいた。わたしだけだった。周りにとけこめていなかったのは。そんな時、同じ役の友達がわたしに相談してきた。

「笑う時に手を口に当てて笑ったら、声がとどかないかと思って。」

と言っていた。本人は、

「つまらないことだけど。」

と言っていたが、わたしはそうは思わなかった。もっとよいげきにしようとして一生けん命になっている友達がすぐ近くにいるのに、わたしはのばせるところをのばさないでいた。そのことが急にはずかしく思えてきた。…

(小5A M.O.「すてきな友達」より)

これらの文章は、現在制作中の文集「緑と霧と」に掲載予定の内容を、二人の児童生徒に了解を得て抜粋したものです。

本校の二大行事である運動会、文化祭ですが、文化祭は一か月前、運動会はもう三か月前の出来事とは思えぬほど、今もありありとその情景を思い浮かべることができます。表彰台から見た児童

生徒諸君の凛としたまなざし、響く声援と歓声、駆け付ける係の担当者、笑顔と涙。スポットライトに浮かび上がる緊張感、観る者を引きずり込む劇と合唱、魂を揺さぶられる声、それらを暗闇で支える照明と音響の係。そして、児童生徒一人ひとりがもつ、当日に至るまでの様々な「物語」。

運動会は、相手を意識しながら一つの競技における勝利や完成を目指して準備や練習を進め、当日にその力をぶつけ合う勝負の世界です。一方、文化祭では一人一人に異なる役割があり、自分自身や仲間を交えて知恵を絞り、工夫を重ねて一つの表現を完成させてゆく、融合の世界です。二つの行事の根本は大きく違うのですが、目指すものはよく似ています。

学校は勉強するところであり、主に授業等を通じて学力の向上を図ります。しかし、人が将来の社会的な成功を図り、「幸せ」をつかむためには、学力以外の力—自信、相手に対する尊敬の念、忍耐強さ、気概、自分をコントロールする力、社会性、状況への対応力等々、まとめて「非認知能力」ともいわれる力—が必要とされています。運動会、文化祭をはじめとする本校の行事では、通常の授業だけでは培えないこれらの非認知能力の伸長…「貢献」の力の育成を図っています。そしてその成果は、子どもたちが見事に体現していると捉えています。

冒頭の二人の児童生徒は、行事を舞台とした友達との関わりの中での自身の気付き、変容—かわっていくこと—を著しています。教育は、対象の変容を期して行われる営みであり、本当の学びをつかんだ者は、その瞬間から自分自身の見方や考え方が転換します。そして、学ぶ前の自分には想像もできなかった世界に立った者は、もう以前の自分に戻ることはありません。ロンドン日本人学校では、大きく「かわっていく」子どもたちの舞台であり続けるよう、努力してまいります。

かわっていくこと

折原 みと

かわっていくことは こわくない

ワクワクしたいな 明日の自分に

文化祭を終えて ONE TEAM

～最高の仲間と創る世界に一つの大舞台～

9月28日(土)、第43回ロンドン日本人学校文化祭の保護者公開が行われました。今年度のスローガン「ONE TEAM～最高の仲間と創る世界に一つの大舞台～」のもと、令和最初の文化祭に向けた準備は、夏休み前からスタートしました。練習が始まると、児童生徒の創造性や表現力と先生方の指導が一体となり、時には葛藤しながらも最高の仲間たちと創る大舞台は徐々に整えられていきました。

保護者公開日の前日は、互いの学年の発表を鑑賞する校内発表日でした。その日は学年の個性に合った素晴らしい発表が行われましたが、私が最も感



激したことは児童生徒の鑑賞態度です。各学年が舞台上で様々な発表を行う中で、面白い場面では大きな笑い声が起こり、

悲しい場面では会場が静まりかえる…。そして、演技を終えて会場に戻ってきた学年には自然と児童生徒から温かい拍手が起こったのです。舞台と児童生徒席は常に ONE TEAM となっていました。

「保護者公開日は、この日以上の発表を！」という児童生徒の強い意志のもと、当日は舞台での活動だけではなく係活動や軽音楽部の発表など最高の仲間たちが ONE TEAM となってそれぞれの舞台を創り上げました。当日ご来場いただいた保護者の皆様からも温かい拍手をいただき、世界に一つの大舞台は児童生徒にとって忘れられない思い出となりました。

にん にん にんじゃ

小学部1年生

小学部1年生は「にんにんにんじゃ」を演じました。忍者の卵に扮した1年生が、様々な試練を乗り越え、成長していくお話です。1年生にとっては、初めての文化祭です。そのため、練習中、お話に登場してくる忍者たちのように、様々な試練がありました。

まずは、声の出し方です。普段の生活において、それほど大きな声を出すことはありません。しかし、文化祭では、体育館の後ろにいる人まで届くように、ゆっくりはっきり、大きな声で話す必要があります。そのため、「もっとゆっくり」「もっと大きな声で」を意識しながら、学校でも家でも繰り返し練習をしました。本番では、練習の成果を発揮し、ゆっくりはっきりとせりふを言うことができました。



次に、せりふに合わせた大きな動きです。遠くに座っている人にも内容がよく分かるためには、大きな動きをすることが大切

です。本番、子どもたちは小さな体を大きく使って、動いたりダンスをしたりすることができました。

最後に、長縄の連続跳びです。「体の修行」と題し、ひっかからずに長縄10回跳ぶことを課しました。練習では跳べても、リハーサルのときは緊張のあまりひっかかってしまい、何度もやり直す場面がありました。しかし、その経験をもとに、本番はひっかからずに無事跳ぶことができました。振り返りの場面で「長縄が跳べて本当によかった。」「うれしかった。」というつぶやきが、子どもたちから聞こえました。これらの経験を活かし、これからの学習や生活で、あきらめずチャレンジし続けてほしいと思います。

わくわくネバーランド

小学部2年生

「スマイル！」

歌の終わりに、両手を上げた子どもたちは、はじけるような笑顔でした。子どもたちはきっと、「うまくいかな



いところを何度も何度も友達と一緒に頑張ってきてよかった。」と、大きな達成感と喜びを味わったことでしょう。

ダンスが覚えられない友達と一緒に踊って教えたり、「お宝を持って帰ろうとする場面は、箱を持ち上げた方がいいね。」とアイデアを出したり、本番までの子どもたちの姿一つひとつに「劇を成功させたい。」という気持ちの高まりを感じました。

ロンドンで出会った44人。「わくわくネバーランド」の劇は、大人になって子ども時代を振り返ったときに「友達と一緒に、イギリスのお話の主人公がたくさん出てくる劇をしたなあ。」と、懐かしく思い出してくれたら…と願って考えました。

子どもたちの作文には、「面白い劇ができたのは、みんなのおかげだなあと感じました。」「友だちが出る場面では頑張れと思って待っていました。」とつぶられています。この劇を通して、決して一人では味わえないダイナミックな喜びを、担任も子どもたちと一緒に味わうことができました。劇のパスワードとなった「スマイル」は学年目標です。これからも自分の人生の主人公として、友達というお宝を大切に、笑顔いっぱい成長してほしいと思います。

みんなで挑んだ難しい劇

小学部3年生

3年生の劇は、「わすれられないおくりもの」という絵本が原作になっています。道徳の授業で学習してきた「命」がテーマの物語です。道徳の授業で学習したときには、子どもたちにとって難しい課題であり、みんなで悩みながら意見の交流をしました。「かけがえのない友との別れ」を劇でどのように表現するのか考えながら劇を創りました。

練習は、発声練習から始まりました。声色は、役やその役



の感情によって変わるので、動物の鳴き声をまねして、いろいろな動物になりきって声を出すように練習しました。せりふの練習を始めると、子どもたちから演技に関して意見が出るようになり、子どもたちが台本を読み込んでいくうちに気づいたことを演技に生かすようにしました。「泣く」演技では、「大人と子どもでは泣き方が違うから、悲しさの表し方が違う」という意見が出てきました。最終的には、台本のせりふにはない行間の演技にも時間をかけて取り組みました。背景や道具の設置・片付けも子どもたちの力で行いました。挑戦することがたくさんあった難しい劇でしたが、本番の演技が終わった後には、子どもたちの「みんなで頑張ってきて、最高の劇ができたよ。」という声と達成感に満ちた笑顔がありました。

協力の大切さ

小学部4年生

保護者公開日が終わり、菩提樹へ向かって走る子どもたちのやり切った笑顔。失敗したことからこぼれ出る涙。そんな友達を必死にフォローする眼差し。どの子どもたちも真剣に取り組んできたことがうかがえる素敵な瞬間でした。

今回の4年生は、歌あり、踊りあり、縄跳び、跳び箱、一輪車、竹馬、リコーダーと、盛りだくさんの劇でした。「協力」というテーマのもと、各パートで声を掛け合い、フォローし合いながら練習を進めてきました。自分が選んだパートながら、初めはなかなか練習に打ち込めなかった子どもも、友達の熱心に取り組む姿勢や声掛けに次第にほだされ、まとまっていきました。休み時間にもパートごとに集まり、練習を重ねることで完成度が高まっていくと同時に、楽しさを見出す子どもも増え、練習の雰囲気どんどん良くなっていきました。

そして本番。直前まで自分のせりふを繰り返したり、縄跳びや一輪車などの感覚を確かめたりすることで少しずつ緊張もやわらぎ、「やるぞ。」という精悍な顔つきに変わっていきました。さらに観客のたくさんの笑い声や手拍子で一気に4年生のオンステージに。これまで見たことのない素晴らしい発表となりました。



今年の文化祭は、例年になくないチャレンジだった4年生でしたが、目標に向かって協力して取

り組むことができました。文化祭で学んだことを活かして、さらに大きく飛躍していった欲しいと思います。

みんなで最高の劇を創る

小学部5年生

小学部5年生は、「人間になりたがった猫」という劇に取り組みました。人間になりたがる猫ライオネルが様々な人と触れ合う姿から、人間の素晴らしさや仲間の大切さ、人の心の美しさなどを感じることもできる劇です。

練習では、友達と良いところも、もっと良くできるところも「伝え合う」ことを大切にしました。みんなで最高の



劇を創る、そのために ONE TEAM となり、互いに高め合いました。その結果、本番では、トップバッターというプレッシャーに負けず、いや、負けそうになりながらも、みんなで支え合ってベストの演技、歌を披露することができました。一人ひとりが練習を精一杯頑張ったことが基本。そして、練習を通して仲間との絆を深めたことで、さらに劇が磨き上げられていきました。多くの子どもたちが、劇後に大きな達成感を得ていました。努力が報われた瞬間、きっとこの瞬間は、子どもたちにとってロンドン日本人学校での大切な思い出の1ページになったことでしょう。

ここで学んだことを深く心に刻み、ONE TEAM 5年生、これからもどんどん伸び合っていきたいと思えます。さあ5年生、次はどんな目標に向かって頑張っていくのでしょうか。

保護者の皆様、今後とも子どもたちの応援をどうぞよろしくお願い致します。

みんなで創り上げる

小学部6年生

6年生が発表した劇「おそすぎないうちに」はいかがでしたでしょうか。今年のテーマは、近年問題となっている地球温暖化についてでした。観る人みんなに地球温暖化について分かりやすく、そして楽しみながら観てもらうことを目標に自分達で劇を創り上げていきましたが、その道のりは平坦なものではありませんでした。



練習が始まってから、同じ場面の友達と何度も話し合いを重ね、様々なアイデアを出し合いながら劇を創っていきました。みんなで作ったアイデアを取り入れたものの、ときには元の形に戻すこともありましたが、子どもたちは諦めることなく納得できるまで練習に励みました。その結果、台本は、少しずつ子どもたちの手によって変わっていき、面白い要素を盛り込んだり、せりふが付け加わったりと、劇がどんどん進化していきました。

合唱曲を歌い終わった後の晴れ晴れとした表情。その表情は、全力を出し切った、自分達で劇を創り挙げたという達成感に満ちあふれていました。

今回の文化祭でぐんと成長した6年生。この文化祭で学んだことをこれからの学習や生活に生かし、何事にもみんなで「Let's Try!」しながら、残りの小学校生活を過ごしていきたいと思えます。

茶畑のジャヤ

中学部

今年度の中学部劇は、2016年度の「第62回青少年読書感想文全国コンクール」で小学校高学年用の課題図書



となった「茶畑のジャヤ」（作：中川なをみ）を題材に台本を作成しました。学校でいじめにあっていた少年「周」は、スリランカで家族の生計を助けるために茶摘みをする少女「ジャヤ」のひたむきな姿に心を打たれ、次第に自立して生きていくことの大切さに気付いていくという物語です。

中学部劇の台本作成と合唱曲の選定、編曲は教員で行いました。しかし、土台をつくった後は「生徒たちの手で創り上げる文化祭」を目指し、監督、助監督、

プロットリーダー、道具係リーダー、合唱パートリーダーなど、各部門のリーダーたちが中心となっ



て活動を進めていきました。劇の練習では、回数を重ねる度にもとの台本と違った迫力あるせりふが飛び出したり、予期せぬアドリブで周囲を笑わせたりと、徐々に演技に磨きがかかっていくのがわかりました。道具係も休み時間を惜しみなく使い、大道具の製作のみならず、実際のステージでの道具の出し入れや音響、照明のタイミングに細心の注意を払うなど、時間に追われながらも3年生が中心となって準備を進めていました。合唱では、練習中に先生から指導が入る場面もありましたが、そうしたときにリーダーたちが集まって「どうすれば…」と話し合う場面も見られ、生徒たちのモチベーションも徐々に高まってきていました。

保護者公開日を1週間前に控えた頃は、本番に間に合うかどうか、それぞれの部門で不安を抱えていま

ました。しかし今思い出すと、あそこから「ロン日中学部の伝統？」ともいえる追い込みが始まったのです。キャスト、照明、音響、大道具が



ONE TEAM となって行った本番2日前の手直し練習。ついに中学部劇と合唱は「最高の仲間たちと創る世界に一つの大舞台」に向けた準備が整いました。

そして迎えた保護者公開日。生徒たちは、大勢の保護者の方々がご覧になるという重圧を感じさせないくらい立派なパフォーマンスを披露していました。生徒たちには、当日保護者の皆様からいただいた大きな拍手を糧に、今後はそれぞれの学年が ONE TEAM となって新たな活動に取り組むことでしょう。て、いろいろな動物になりきって声を出すように練習しました。せりふの練習を始めると、子どもたちから演技に関して意見が出るようになり、子どもたちが台本を読み込んでいくうちに気づいたことを演技に生かすようにしました。「泣く」演技では、「大人と子どもでは泣き方が違うから、悲しさの表し方が違う」という意見が出てきました。最終的には、台本のせりふにはない行間の演技にも時間をかけて取り組みました。背景や道具の設置・片付けも子どもたちの力で行いました。挑戦することがたくさんあった難しい劇でしたが、本番の演技が終わった後には、子どもたちの「みんなで頑張ってきて、最高の劇ができたよ。」という声と達成感に満ちた笑顔がありました。